

特集にあたって

日比紀文

1 特集の意図

今回、消化器Bookシリーズとして炎症性腸疾患を特集することになった。炎症性腸疾患患者は増加の一途をたどりクローン病で3万人を超え、潰瘍性大腸炎では11万人を超えるに至った。これまでは一部の施設で特定の医師が診察にあたっていたが、一般の消化器内科医が日常診療の中で患者に遭遇し診断・治療を行わなければならない時代となったと言えよう。

そのため研修医、若手消化器内科医から炎症性腸疾患の日常診療に役立つ実践的なテキストブックが熱望されている。これまで総論的な知識を記載した教科書は多く出版されているが実践的なものは数少なかった。そこで本特集ではまず執筆していただく先生方としてできるだけ中堅の先生方をお願いした。執筆者はいずれも学会などで活躍されているだけでなく日常臨床の第一線で多くの患者の診療に携わっている、いわゆる脂の乗った現役医師である。

2 内容と特徴

また内容の面でも実践に役立つような構成に工夫したつもりである。炎症性腸疾患の診断・治療はここ10年間で大きく変化した（第1、2章）。診断面ではもちろん病歴聴取と理学的所見を正確にとることが最重要であるが、小腸内視鏡やカプセル内視鏡の登場や、CT・MRIの画像処理の進歩により得られる情報が飛躍的に増加した。これらのモダリティをいかに有効に使うに役立つかが今後は重要である（第3章）。

治療面はさらに大きく変化している。特に抗TNF- α 抗体を代表とする生物学的製剤の登場がクローン病、さらには潰瘍性大腸炎の治療体系を大きく変えつつある。さらに本邦独自の治療として経腸栄養療法、白血球除去療法や経口タクロリムス療法が存在し、われわれの使える治療手段はきわめて多彩となった（第4章）。一方でどのような治療を選択すべきなのか、副作用の問題をどう考えるのか、医療経済的効果はどうか、といった新たな問題も出てきている。これらの変化に対応できるよう、本特集では海外からのエビデンスのみではなく日常診療で役立つようにできるだけ具体的に記載してもらおうようお願いした。

さらに“知っておくと得する実践に役立つ知識”（第5章）や“炎症性腸疾患エキスパートを目指して”（第6章）の章では日常診療で遭遇しやすいさまざまな疑問に対応しており患者さんや家族に病状の説明をする上で大いに役立つものと確信している。そして最後にケーススタディを用意させていただいた。ここで読者の先生方には一緒に参加してもらい数名のエキスパート医師たちのディスカッションを楽しみながら実践力をアップしていただきたい。

3 本特集を読まれる方へ

本特集はこのように若手医師たちのための“日常診療で使える実践書”を目指したものである。ぜひ医局や書斎の本棚に並べるのではなく、外来や病棟などすぐ手の届くところに置かれ気軽に利用していただければと願っている。

最後に、お忙しい中、本企画の趣旨に賛同し執筆に当たっていただいた先生方に深く感謝する所である。

Profile 日比紀文 (Toshifumi Hibi)

慶應義塾大学医学部 内科学(消化器) 教授

1973年3月慶應義塾大学医学部卒業。1977年3月慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程修了。同年4月慶應義塾大学医学部内科学入局。1982年よりトロント大学免疫学教室研究助手。帰国後、北里研究所病院内科医長、慶應がんセンター所長などを経て2004年4月より現職。2010年9月より慶應義塾大学病院免疫統括医療センターセンター長兼任。主な所属学会は、日本消化器病学会(理事)、日本大腸肛門病学会(理事)。専門は消化器疾患、特に腸疾患

